



入谷小校長室だより 顔晴れ！入谷っ子！

2019年12月2日

No. 9

TEL 46-2655

FAX 46-2654

学校教育目標：夢に向かって、主体的に学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成

目指す児童像：《一かしこくー 一たくましくー 一やさしくー》

☆いつもまなぼうとする子 ☆りりしくたくましい子 ☆やさしくたすけあう子

心も体も元気な子どもを育成するために 家族みんなではやね・はやおき・あさごはんを実践しよう!!

文責：校長 高橋 有

師走 ～人権の大切さを再確認する機会に！～

早いもので、あと3週間で2学期の終業式を迎えます。66名の子供たちは、様々な教育諸活動において『自己ベスト』を目指し、ひたむきに取り組んできました。この姿を見るにつけ、子供たちが、一步一步、成長している証であることを感じています。このような姿が見られたのも、ご家庭、地域のご支援やご協力のお陰と感謝申し上げます。

《師走・・・人権の大切さを考えさせる機会に！》

12月10日は、国際連合総会で、世界人権宣言が採択された日（『人権デー』）です。（1948年）採択されたことを記念して、日本（法務省と全国人権擁護委員連合会）では、12月4日（水）から10日（火）までを「人権週間」と定めています。

いじめ問題をなくすためにも、人権については、その都度、具体的な例をあげて話すことが大切ですが、人権週間は全国的に社会全体で取り組んでいこうとする期間です。4日からの1週間、ご家庭においても「人権」について話題にしてほしいと思います。

「人権とは」・・・人としての権利（お子さんと話すときの参考に）

私たちは、生まれてきた以上、皆必要とされています。なぜなら、同じ人間はいないからです。それは、一人一人の顔や性格が違うことで分かると思います。一人一人に他の人にはないよさがあります。一生懸命作った作品それぞれに、違うよさがあります。お子さんに、一人一人の「よさ」を見つけさせることを意識させてほしいと思います。そうすれば、低学年でも、人権というものが少しずつ分かってくると思います。もちろん、お子さんのよさも伝えてあげてください。

【参考までに】 -ご家庭で「心のモノサシ」について考えてみてください。-

『子供のモノサシ、大人のモノサシ』～思いやりを育む家庭教育～



- 1 私達の心の中には、物事の価値を測るモノサシがあります。それは、一人一人違ってきます。
- 2 大人のモノサシと子供のモノサシの違いを認めることが大切です。子供のモノサシを尊重し、時には子供のモノサシで測ることも必要です。また、親と子がモノサシの違いを互いに認め合うことで心が響きあっていきます。
- 3 「普通」「一般的」など一律のモノサシで測りがちですが、その子にあったモノサシで、子供の個性や良さを認めてやれる大人でありたいものです。
- 4 親のモノサシは子供に多大な影響を与えます。子供は親のモノサシを受け継いでいきます。人生観や生きる上での指針にもなっていきます。
- 5 ぶれない、揺れないしっかりしたモノサシと、柔軟で変化可能なモノサシと両方持ちたいものです。
- 6 子育てには長く大きなモノサシをあてましょう。長いモノサシを持っていれば、叱らなくてすむことがたくさんあります。また、子育ては順調な日ばかりではありません。雨の日、嵐の日もあります。長いモノサシで、雨や嵐が来ることが分かっているならば、それに備えることができます。

【子育ては親育て】より～海老名市教育委員会～

《11月の職員会議で教職員に提示したことばです！》



のことば・・・



『本当の優しさとは 他人に気づかれずにやること』

《島田 洋七》

『佐賀のがばいばあちゃん』というお話を読んだり、聞いたりしたことがあるかと思います。作者は島田洋七さんという方で、元「B&B」という名前で漫才をしていました。

この島田洋七さんは広島に住んでいたのですが、小学2年生の時、お母さんと別れ九州の佐賀県に転校し、ばあちゃんと一緒に暮らすことになりました。このばあちゃんが「がばいばあちゃん」でした。

「がばい」とは「すごい」という意味のようです。

このばあちゃんは何がすごいかというと、すべてプラス思考、よいほうに考えることです。貧乏をしても不幸とは決して思わないのです。「貧乏には二通りある。暗い貧乏と明るい貧乏。うちは明るい貧乏だからよか」と言っています。苦勞しても決して辛そうな顔を見せずいつも明るくしようとしています。幸せはお金なんかで決まるものではない、心の持ち方、考え方で決まるんだと思います。

小学2年生の運動会でのお話です。

洋七さんは、教室で一人ばあちゃんにつくってくれた梅干し弁当を食べようとしていました。担任の先生が「ちょっと腹壊してしまって、梅干しとショウガはお腹にいいから弁当取り換えてくれんか」と頼みに来ました。その弁当は見たこともないような豪華で美味しい弁当でした。運動会での担任の先生の腹痛と弁当交換は3年から6年まで毎年続いたそうです。

腹痛の意味を知ったのは、6年生になって初めてその話をばあちゃんにしたとき。ばあちゃんは、洋七にこう言いました。「それは、先生がわざとしてくれたとよ」「それが本当の優しさよ。お前のために弁当を持ってきたって言ったら、お前もばあちゃんも気いつかうやろ？だから先生は、お腹が痛いから交換しようって言ったとよ」と教えてくれました。

この本から、ばあちゃんの心の強さと奥深い優しさが伝わってきます。私たちはだれかに感謝されたくて優しくしているのではありません。その人を大事にしたいから優しくするのだと思います。ばあちゃんがよく言っていたという「本当の優しさとは他人に気づかれずにやれること」は、とても大切なことを私たちに教えてくれていると思います。